

# 共生社会（Decent Society）の 可能性と共生教育学の課題

門 脇 厚 司\*

## The Possibility of Decent Society and a Proposal of an Alternative Education

Atsushi Kadowaki

近代社会は、「人間はもともと利己的な動物である」という人間観を前提に社会の諸制度を構築し運営してきたといえる。近代公教育制度といわれる制度のもとで為されてきた教育もその例外ではない。人間が皆な利己的であるとすれば、幸福な生涯を実現すべくより多くの資源を獲得しようとするのは必然、そのための努力や競争が社会の発展につながるという考えのもとに導入されたのがメリトクラシー原理であった。義務教育を実現し教育の機会を平等にした上で能力競争に勝った者に多くの資源を与えるという社会構成原理であり社会運営原理である。しかし、メリトクラシー原理に基づく社会はいま様々な綻びを露呈するに至っている。本論は、このような局面を意識し、利己的人間を前提とした能力競争社会に代わる社会として共生社会を構想し、その可能性を検討しつつそのような社会の実現に貢献できる新しい教育学の骨子を提案したものである。

### はじめに

近代社会は、人間は誰もが利己的な行動をするものだという利己的人間を前提とした社会である。人間は皆、自分の利益を最大にするために合理的な判断をし、そのために最も適切な行為を選択し行動しているという人間観の上に立ち、社会の構成原理を考案し運用してきたといえる。そして、また、そのような人間を是とし、そのような人間になるよう奨励し教育してもきた。しかし、いうまでもなく、社会が有する資源は無限ではない。とすれば、社会を構成するすべての人間の利益を最大限にすることを保障することはできない。そこで、考え出されたの

---

\*筑波大学教育学系

がメリトクラシー原理であった。競争に参加する機会を平等にすることを条件にした上で競争を徹底させ、競争の勝者にはより多くの資源を配分し、敗者にはそれに応じた分の資源しか配分しないというやり方である。それゆえ、自分の利益を最大にするためにより多くの資源を獲得したい者は、それだけの努力をし、能力を高め、競争に勝つしかなく、努力を怠り能力を高め損なった結果として競争に負けた者は応分の資源を受け取ることに甘んじる他ないことになる。近代社会は、このような約束事を周知徹底させ、それにもとづき社会を運営してきたということである。近代の公教育制度はまさにこのような原理を周知させ実行する社会的装置として考案されたものであり、学校がそのための中核的な場として用意されたものであることは今更言うまでもない。

しかし、メリトクラシー（Meritocracy、能力本位）を社会を構成し運営する原理とする競争的な社会は、20世紀の後半の四半世紀間に、極めて困難な事態に直面するに至っている。南北間の貧富の格差の拡大とそれに伴う地域紛争やテロ行為の多発、人口増加に伴う食糧と資源の絶対的な不足、資源の大量消費による地球環境の破壊などがその一端である。このような事態によってもたらされた経済不況の長期化から脱出すべく、先進国はどれも、教育や仕事の場における能力主義と競争の徹底を推進しているが、そのこと自体、メリトクラシーを社会の運用原理とする競争社会の最後の悪足掻きといえる。利己的人間を前提とした功利主義的な能力本位の競争社会は、すでに、その原理を徹底すればするほど事態を一層悪化させる悪循環に入ったとみてよい。

とすれば、われわれがいま早急に為さねばならないのは、競争社会に代替する新しい社会（alternative society）を構想することであり、そうした社会を実現し維持するに相応しい人間像を具体化し、そのような人間を育て教育するための新たな教育学を構築することである。本論は、そのような意図をもって構想される社会とそれを実現するために構築されるべき教育学のデッサンとでもいえるものである。

## 1. 利己的人間観の再検討

近代社会を長く生きてきたわれわれにとって、個人とか個我とか個性とか、あるいは自分とか自我とか自己とか主我とか主体とか、さらには自主性とか自立性とか自律性とか主体性といった概念とそれに伴う実体の存在はもはや当然のこと

となってしまう。このため、人間や社会について何かものごとを考えようとするとき、まずもって「個」や「我」や「自」の存在を前提とし発想することに慣れ切ってしまう。それゆえにまた、「真の自己」とか、「本当の自分」とか、「自分本来の姿」といったものが実体として存在しているかのように錯覚してしまい、それにこだわるあまり、「他者」が存在することの意味や重要性を無視するか軽視することになっている。

こうした見方や考え方が当然視されるにおよび、今度は個人間の競争が当然のこととみなされるようになる。言うまでもなく、社会を構成しているのは複数の人間である。そして、誰もが社会の中で、個人として、よき人生を生きたいと考え、そのために自分の持てる資質や能力をフルに活用するのは当然のことであり、そのことによって得られる「利」や「益」を自分が欲する快適な生活や望ましい人生のために活用するのも当然のこと、であるとしたら、社会が保有する資源に限りがある以上、より多くの資源獲得をめぐる個人間の競い合いが生ずるのは当然であり、競い合いの結果にもとづき「利」や「益」を配分することになるのもまた人間の本性に適った自然な現象であるというわけである。むろん、そうではないとする考え方や説もあるにはあるが、この世に生をうけて生きる大多数は先のような考え方を当然のこととして受け入れ、その中で、わが身の幸せを求め、他者と競い合い、心ならずも他者を蹴落として生きているのが現実である。

このような見方や考え方を正当化する言説の背後に「人間は本来利己的な動物だ」とする人間観がある。では、本当に、人間は本来利己的な生き物なのか。共生社会の可能性を検討する前に、まずこの点について検討を加えておくことにしたい。

### 1-1 ドーキンスの「利己的遺伝子」説

人間は本来利己的な動物であるという人間観に科学的な根拠を与えているもっとも有力な理論がイギリスの生物学者リチャード・ドーキンスの利己的遺伝子説である（Dawkins 訳書、1991）。世界的なベストセラーとなった著書『利己的な遺伝子』の中でドーキンスが書き記しているメッセージ性の強い箇所を次に書き出しておこう。すでにこの世で優位な位置を占めている多くの人々に共感されたのはこの部分であったと思われるからである。

「この本が主張するところは、われわれおよびその他のあらゆる動物が遺伝子によって創りだされた機械にほかならないというものである。成功したシカゴのギ

ヤングと同様、われわれの遺伝子は競争の激しい世界を何百万年も生き抜いてきた。このことは、われわれの遺伝子に何らかの特質があることを物語っている。私がこれから述べるのは、成功した遺伝子に期待される特質のうちでもっとも重要なのは無情な利己主義である、ということである。

ふつう、この遺伝子の利己主義は、個体の行動における利己主義を生み出す。しかし、遺伝子が個体レベルにおけるある限られた形の利他主義を助長することによって、もっとよく自分自身の利己的な目標を達成できるという特別な状況も存在するのである。この最後の『限られた (limited)』と『特別な (special)』という語は重要なことばである。」(p. 17)

「個体は安定したものではない。はかない存在である。染色体もまた、配られてまもないトランプの手のように、まもなくまぜられて忘れ去られる。しかし、カード自体はまぜられても生き残る。このカードが遺伝子である。(中略) 彼らは自己複製子であり、われわれ (個体) は彼らの生存機械なのである。われわれは (彼ら遺伝子の) 目的に仕えたあげく捨てられる。遺伝子は地質学的時間を生きる居住者である。遺伝子は永遠なのだ。」(p. 63)

「遺伝子レベルでは、利他主義は悪であり、利己主義が善である。遺伝子は生存中その対立遺伝子と直接競い合っている。遺伝子プール内の対立遺伝子は未来の世代の染色体上の位置に関するライバルだからである。対立遺伝子の犠牲の上に、遺伝子プールのチャンスをふやすようにふるまう遺伝子は、どれも、その定義からして、生きのびる傾向がある。遺伝子は利己主義の基本単位なのだ。」(pp. 65-66)

該博な知識を存分に散りばめつつ展開するドーキンスの大部の本は読者を魅了するに十分な内容になっているが、言わんとするところは、要するに、われわれ人間個体は遺伝子のノリモノ (vehicle) にすぎず、そのノリモノを操る遺伝子が利己的である以上、人間個体も本源的に利己的であらざるをえない。それでも、時折、人間が利他的行動をみせることがあるが、それも遺伝子が生きのびるために取る戦略にすぎず、人間に本源的な行動ではない、ということに尽きる。

恐らく、社会の中で、何がしかの成功をおさめたと自負している人たちの多くは、自分の成功が自分の能力と努力の結果であると自認しているはずである。苦しい戦いを利己的になることを厭わず勝ち抜いてきたからこそ今の安楽な生活を享受でき、自尊感情を保持しえているのだという自負と自信である。このような

人たちがドーキンスの本を手にし先に書き抜いた箇所を目にしたら、内心おおいに同感し喜ぶはずである。そして、自分が、敗者となって脱落していく他の人々を顧みることなく、勝ち抜くことに全力を傾けてきたのは、人間としてごく自然な行為であったのだと自分を正当化し、安堵し、深い眠りについたはずである。

## 1-2 利己的遺伝子説に対する社会学者の反論

しかし、人間という生物個体の行動特性を規定する遺伝子が利己的である以上、人間個体が利己的に行動するのは本源的なことであるとするドーキンスの説は果たしてそのまま真にうけていいことなのか。われわれの結論は否である。社会学者・見田宗介氏によってなされた(真木悠介 1993)ドーキンス説への反論はまさに正鵠をえたものであると考える。そこで、ここでは見田氏の反論を紹介することで、ドーキンス説を否定する根拠にしておくことにする。

見田氏は真木悠介というペンネームで著した『自我の起源』の中でドーキンス説への反論を展開しているが、批判のポイントは次の2点に集約できる。

1つ目は、仮に、動物個体の遺伝子が利己的であることが本当だとしても、そのことがそのまま動物個体の行動がすべからく利己的であることを意味しないということである。むしろ、個体が遺伝子ノリモノであること、そのこと自体が個体の利他性こそ本源とすることを意味しているとする。

いわく。「動物の個の身体が、本来は、それ自体の『ために』ではなく、そこに乗り合わせた遺伝子たちの自己複製のメディアとして形成され展開されてきたものである、という社会生物学の理論の合理的核心自体が、(俗見とは逆に)、個体の『利他性』の普遍性こそ立証している。」(p. 36)と。

批判の2つ目は、動物の個体は、高等になるほど、それ自体の独自の目的を設定しうる可能性を高めていき、その結果として、(a)遺伝子の存続などという遺伝子の都合を無視した行動を選択するし(これこそエゴイズムである!)、(b)たとえば、自分の身体を(同時に遺伝子も)消滅させることになっても、個体としての人間は自分の意思で、血や種の異なる他の個体の生存に献身することもできるのだ(純粋な愛!)、という指摘である。すなわち、「個体という上位システムの創発的(emergent)な自律化が、みずからの創造主たる遺伝子のテレオノミー(遺伝子を生きのびさせるという究極の目的)に反逆し、個体の自己目的性を獲得することがありうる。」(p. 36)という。

産卵死する宿命を拒否し大海にひとり悠然と遊ぶ紅鮭はいないかもしれないが、

溺れそうな赤の他人の子を助けるべく大海に飛び込む人間は少なくないということである。

見田氏のこうした反論を踏まえつつ、若干、私なりの考えを付け加えておくことにしたい。まず、第一の指摘については、社会生物学者たちが「包括的適応度」(ハミルトン)とか「利己的遺伝子」(そもそも、この概念はドーキンスの造語ではなく、ギブソンが1923年の時点で使用しており、生物個体が遺伝物質の一時的乗り物にすぎないという見方も、ワイスマン以来の現代ダーウイニズムに広くみられる考え方である)といった概念をひねり出し用いるようになったのは、「自然淘汰、敵者生存」説だけでは十分説明できなかった「動物個体に広くみられる利他的行動が代々引き継がれてきたわけ」をうまく整合的に説明するためであって、遺伝子が利己的であるから、個体もまた利己的であることを主張するためのものではないということである。

また、第2の点については、ドーキンス自身が、ホモ・サピエンスたる人間にだけ、遺伝子に逆らう「意識的な先見能力」なる独自の個性があることを認めていることを指摘しておきたい。そうした言明は、例えば、「個々の人間は基本的には利己的な存在なのだとしても、われわれ(人間)の意識的な先見能力(想像力を駆使して将来の事態を先取り(simulate)する能力)には、盲目の自己複製子たちの引き起こす最悪の利己的暴挙からわれわれを救い出す能力があるはず」(p. 320)であり、「私たち(人間)には、私たちを産み出した利己的な遺伝子に反抗し、さらにもし必要なら、私たちを教化した利己的のミームにも反抗する力がある」(p. 321)というものである。動物行動学者や社会生物学者といえども、人間の行動がすべて動物の行動原理で説明できるとは考えていない、と理解しておいていだろう。

ドーキンス説についてあと1つ付け加えておけば、ドーキンスは「意識的な先見能力」の他に、「ミーム(meme)」なる自己複製子を持っていることを言明していることである。このミームとは、「文化遺伝子」ないし「文化遺伝の単位」と言い替えることができるものであり、「現代人の進化を理解するためには、遺伝子だけを唯一の基礎と見做す立場をまず放棄しなければならない。」(p. 305)とさえ言い切っている。このような言明は、ドーキンス自身、人間が文化によって規定される生物であることを、すなわち人間が生まれた後に社会的に形成される社会的な動物であることを認めていることの証しに他ならない。

## 2. 利他的人間観の信憑性を裏付ける根拠

人間は社会的な動物であると言い放ち、なにゆえそうであるかを説得的に説明した最初の哲学者がアリストテレスであるのはよく知られていることである。以来、こうした見方が受け継がれ今日に至っている。恐らく、自分の日々の生活経験を通して、そうした見方が否定すべくもないことを実感した人々がそのままそう言い伝えてきたものと思われる。それはそれで自然な成り行きであったのであろうが、それに加え、近年は、動物行動学者や社会生物学者や進化心理学者や脳科学者たちの研究によって人間が社会的な動物であるどころか、本源的に利他的な動物であることが明らかにされてきている。以下、そうした近年の研究のいくつかを紹介しておくことにする。

このような見方を最初に力を込めて提唱したのが他ならぬダーウィンその人であった。ダーウィンが1871年に著わした『人間の由来 (The Descent of Man)』の第4章で展開した「社会的本能」説がそれである。ダーウィンの社会的本能説について書いた内井物七氏の論文に依って、社会本能説のポイントを紹介すると次のようになる (内井 1997)。

ダーウィンによれば、知的能力、道具使用能力、言語使用能力など人間がもつかなり高度な能力は萌芽的なたちで他の動物にも備わっているとされ、道徳能力も例外ではないとされる。善悪を区別し、良心に従って行動を規制もする道徳能力は、社会的動物であり、かつ高い知性を備えた人間の生物的本性、すなわち社会的本能に由来するとされる。そして、この社会的本能とは、仲間との交わりを好み、共感を感じ、仲間に対する奉仕を行うような性向であり、本能であるからには、当然、遺伝的な基盤をもつとされるものである。では、なぜ、このような社会的本能なる生物的本能が進化の過程で人間に蓄積され、遺伝によって伝承されてきたのか。もちろん、ダーウィンは詳しい仮説を展開しているが、その紹介は省く。仮説はあくまで仮説であって、何らかの証拠によって証明されないかぎり仮説のままであるからである。

ところが、近年、ダーウィンの仮説が動物生態学者や社会生物学者たちによってかなり裏付けられてきている。そうした研究成果の1つとして内井氏が紹介するのが、オランダの生んだ霊長類行動学の奇才といわれるフランシス・ド・ヴァール (Frans De Waal) の最近著『善き本性；人間と動物における正と不正の起源 (Good Natured; the origins of right and wrong in humans and the other animals)』で

ある。

人間について考察するには、単体としての個人をベースに考えるのではなく、個人間の関係こそ基本にしなければならないという考え方にもとづき、ド・ヴァールが霊長類の観察を続け、そこから得られた観察データをもとに考察し提示する内容は、人間の本質を知る上できわめて示唆に富むものとなっている。その中でも特に注目に値するいくつかを紹介すると次のようになる。

- ①人間の道德感情は他者への共感と高度な知的能力によって形成されること、そして、この共感能力は「他者の感情や他者のおかれた状況を認知して自分が代わりに同様に感じる能力」にさらに「他者（の利益）に対する配慮」が加わったものであること。
- ②血縁関係や狭い共同体を越えた道德が可能になるためには、相互的な利他行動が不可欠であること。
- ③社会性の強い動物であるチンパンジーや人間にあっては、行動や関心が、「共同体の中で生きる個体やその血縁者が、彼らの享受できる利益を増すような共同体の特徴を増進させることに対する関心」とされる「共同体への配慮」によって貫かれていること。

「情け（利他行動）は他人のためならず」という古くからの諺は、「情けは社会のためなり」と言い換える必要があるということである。人間の道德にもとづく行動や利他的な行動は、それを行う個人の立場や都合をベースに説明するよりも、社会全体の都合をベースに説明した方がはるかに納得がいくということである。これらと併せて、あと2つ、

- ④ある個人の他者に対する一時的な攻撃も、長期的にみれば、和解を前提になされているのであること。
- ⑤自分が恐れる事態（罰）を予見した行動や、自分が愛着を感じる相手との関係を損なうことを恐れる感情は、「罪の意識」や「恥の意識」と極めて近い距離にある、

という指摘もまた説得力ある見解として付け加えておくことにしたい。

この他、雑誌『科学』1997年4月号の特集「人間のこころの進化」に寄稿された諸論文は、こもごも、人間という社会的動物が、利他的であらざるをえない生き物であり、また利他的であることが自己の幸福と社会の存続にとっても有利であることを書き記している。市場経済が地球上を席卷する以前の民俗社会では、



人間は本源的に社会的であり利他的であったとみるのが妥当のようである。

さらに、あと1つ、人間が本来利他的な動物であるとする脳科学者・澤口俊之氏の説を紹介しておこう。

澤口氏(澤口 2002)は、まず、人間より身体の大きな他の動物の脳に比べ人間の脳が容量の割になにゆえ大きいのかについて調べ、人間は社会をつくり、その社会の中で他の多くの人たちと良い関係を作り、言葉を交わし、他人の心を読み、折り合いをつけ、持ちつ持たれつしながらでない生き伸びることができなかったからであるという説を提唱した。このいわゆる「社会脳仮説 (Social Brain Hypothesis)」は、いまや、脳科学者たちの中で広く支持されるに至っている。こうした研究を踏まえ、澤口氏はさらに、このような意味で社会的動物であるしかない人間は根源的に互惠利他的であるほかになく、そのような動物として進化してきたと主張する。

曰く。「ヒトは社会性を発達させるにともない、この利他的行動をも進化させてきた」「ヒトは良識ある社会行動をせざるをえず、このことがPQ (Prefrontal Quotient = 前脳知性) を発達させてきた」「ヒトが進化するにつれ、編み出してきた共生戦略とは、このように『お互いに利益を分かち合う』、そして『他人に貢献する』という二つを兼ね備えた、いわば『互惠利他主義』だった」「最も大きな前脳連合野をもつヒトでこそ、最も互惠と利他が発達している」「互惠利他主義はヒトで最大限発達した」(澤口 2002, p.122, pp.171-2)。

このように説明し主張する澤口氏は、最後に、「なぜ、ヒトは前脳連合野を発達させ、豊かなPQを育んできたのか」と問い、「“自己中” (自己中心主義) を捨て、互惠利他主義を徹底しないと人間の未来はないから」だとまで言い切っている (p.174-5)。これ以上の説明は不要であろう。

### 3. 共生社会 (Decent Society) のイメージと構成原理<sup>①</sup>

ヒトという動物が社会的な動物であるがゆえに利他的であることを本源とせざるをえない生き物でありながら、では、なにゆえに、いま、互いに競い合うことを余儀なくされ、他人を蹴落とすことによつてのみ己が幸せを実現しようとするようになったのか。われわれが次に考えなければならないのはこのことである。その答えを端的にいえば、多くの人々の欲求を充足する性能のいい、それゆえに高値で売れる商品を、できるだけ安いコストで大量に生産し販売することで利益

をあげ、そうすることで国と国との間の経済競争を勝ち抜いていくことを本旨とする近代産業社会のなせる仕業ということになろう。「人間は利己的な動物である」とする広く信じられている言説もまた、近代産業社会が進展する過程で創作され、制度化された義務教育の過程で国民すべてに教え込まれていったものであると考えて間違いない。

なぜそういえるのか。そのことを説明し証明している論文や書物は膨大な数に上るはずである。しかし、いまここで、それらのすべてを集約し紹介するいとまも力量も持ち合わせていない。そこで、ここでは、私なりの見解を簡潔に書き記すに止どめたい。

人間利己説は、森重雄氏の言を籍りて言えば、近代市民社会が、共同体から解放された「自由な個人＝寄る辺ないただの人 (free individual)」を束ねた国民国家を基本にした産業社会であることから必然的に生ずる競争を奨励し正当化するための言説であったということである。

近代市民社会を構成する市民といわれる人々は、基本的には「free になった individual」である。これを「自由な個人」として肯定的に見做すこともできるが、その実体は、土地から切り離された農民であり、生産用具を取り上げられた職人であり、顧客や取引相手を奪われた商人であった。要するに、「何もない (free) 個の人」であり、それ自体としては、無価値 (free) で、無内容 (free) で、無関係な (free) な人間ということになる (森 1999)。したがって、産業社会で生きる市民は、おのが体力と知力のみ交換の場に持ち込むしかない労働者たらざるをえず、労働力を売った対価として受け取る賃金で、生き延びるに必要な物品を買い暮らしを立てる消費者として生きるしかない存在であった。こうした人間にとって、「欲求充足こそ善なり」とする功利主義者の言説は極めて分かりやすく納得いくものであり、「公平なる能力競争に勝ち抜いたものがより多くの快を享受すべし」とするメリトクラシーの考え方もまた極めて受け入れやすい言説であった。こうして、「人は皆、己の快を最大限にすべく行動するものである」という考え方が当然視され、さも普遍的な真理であるかのごとく、人々の脳の中に浸透していった。

### 3-1 新しい社会 (Alternative Society) を構想するということ

社会的動物としての人間の本源的特性が利他的であること、にも拘らず、国民国家と産業社会として特徴づけられる近代市民社会は、その特異な社会の営みと

教育を通して、利己的な行動を公認し助長することになり、今では、個人が利己的に行動するのは当然であり、そうするのが人間に本源的な行為であるかのように思い込まれている。人間がこのまま、おのが能力を活かしておのが利益を最大限にする行為を当然のこととし、そうした行為を互いに競い合い続けていったら社会はどのような様相を呈することになるのか。また、そうした利己的な営みを是とした産業社会が、これからも、さまざまな資源を製品化する技術を開発し、作った製品を商品として大量に売り込み、それら商品を気前よく消費することを奨励し続けたとしたら、地球資源はどうなるのか。現在62億人といわれる世界人口が50年後には90億人を越えると予想されている状況の中で、これだけ多くの人間が商品を消費続けたとしたら、地球環境はどうなるのか。そして、その果てに、人類はどういう結末を迎えることになるか。こうした事態を真剣に考えたことがある人間なら誰もが、悲劇的な見通しを持つはずである。

人類社会が、大きく方向転換せず、大量生産と大量消費の競い合いを是としたまま悲劇的な結末を迎えることを回避するために、われわれは、個人主義と個々人の利己的行動を是とした能力主義を社会運営の基本原則とする社会に代わりうる別の社会を構想しなければならない。そのような社会はどのような社会なのか。そのとき、社会を運営する基本原則はどのようなものでなければならないか。さらには、そうした社会を実現し維持するに相応しい人間はいかなる人間像としてイメージしたらいいか。

今更という誘りは免れ難いが、こうした課題に答えるべく、あるべき社会についてあれこれ考え、関連する文献を読み進むにつれ念頭に去来するのは、いま生きている社会に代わる新しい別の社会を構想するのは並大抵のことではない、ということである。さらに進んで、そのような社会を構想すること自体、自己矛盾なのではないかという疑念が生じてくる。自分がいま生きている社会と異なる別の社会を構想し提案するというのは、いま生きている社会と積極的にかかわる(コミットする)ことを避け、日々の生活をないがしろにすることにつながるのではないかという疑念である。

こうした困難や疑念や自己矛盾を感じつつ、それでもいまある社会に代わりうる社会を構想し、そのような社会を実現すべく積極的にかかわろうとするのもまた人間固有の特性である。以下は、そのように考える人間が構想する一つの私論である。いずれ一書を成して世に問うことにするが、ここでは、与えられた紙幅

の制限内で、その骨子を開陳しておくことにしたい。

### 3-2 共生社会のイメージと社会構成原理

まず、産業社会といわれる現在の社会に代わる新しい社会を「共生社会 (Decent Society)」と名付けるとして、この共生社会をどのような社会としてイメージしているか。端的にいえば、「社会を構成し、そこで生きている誰もが、他の構成員の誰をも、精神的にも、肉体的にも、傷つけない (do not harm) 社会」である<sup>4)</sup>。

なぜ、新しい社会を共生社会と呼び、その社会の英訳に Decent Society を当てようと考えているのか。そうでなければならぬと考え、そうであるべきだと考えている理由はむろんある。これまた、端的にいえば、これからの社会は、自分の利益を最大限にすべく互いに競い合う社会ではなく、それぞれの個人が備えている能力や利点を他者の利益のために提供することを当たり前のこととし、そうすることで共に快く生きていける社会であるべきだと考えているからであり、そのような社会を構成しそこで生きる人々は、すべからく人間としての品位と優しさ (decency) を備えてほしいと考えているからである。となれば、品位とか、優しさとか、思いやりといった、プラスの価値を増やす方向で人間の在り方を考え、社会をイメージ (構想) するのが普通であろうが、そうせずに、“互いに傷つけない” 人間と社会の実現をイメージしているのは、プラス価値の増幅ではなく、マイナス行為の縮減の方が現実的であるとする考え方に基づいているとのみ言うに止めておく<sup>5)</sup>。

このような説明だけではまだ共生社会を具体的にイメージするのは難しいはずである。そこで、より具体的にイメージしてもらえよう、私案として考えている共生社会の4つの特徴について説明しておくことにする。要点のみ整理すれば、次のような内容になる。

- (1)性や人種や家柄など、自分の責任を問われる理由や根拠がない事柄で、特定の人々を社会的に差別したり、不快にさせたり、傷つけたりしない社会。
- (2)限りある社会的資源を平等に配分することより、自分の“善き生”を構想し実現するために必要な、人々の潜在能力 (capability) を最大限に高めることを優先する社会。
- (3)自分の優れた能力や豊かな資源を、他の人の“善き生”の実現のために提供することを互いに当然のこととする社会。

(4)他の人をケアすることが（他者に対する配慮的な行為が）、自分の生き甲斐を高め、自分の“善き生”を実現することになる社会。

このような社会をイメージするに当たっては、当然のことながら、J. ロールズ、R. ドーア、A. セン、A. マルガリット、あるいは市井三郎、花崎皋平、池川清子、川本隆史、神野直彦ら多くの先人や先学者たちの考察や提案に示唆を受けていることは言うまでもない。しかし、それぞれの考察や提案に言及しコメントする紙幅の余裕はない。詳しい言及は他日を期すことにしたい。

#### 4. 共生教育学の課題

では、このような特徴を備えた共生社会を実現するとして、そのために、意図的な教育によってどのような資質や能力や行動特性を備えた人間を育成する必要があるのか。共生教育学が構想され、実践を導き支える学問領域として有用性を認知されるにはどのような内容を備えていなければならないか。私の構想を一言でいえば、Meritocracy 原理から Decentocracy 原理への転換を図る教育学ということになるが、その全容を構想し、本稿でその内容を開示するのは到底無理である。そこで、いまは、その骨格になる、また骨子にすべきであると考えている2つのことを書き留めておくことにしたい。

まず1つは、他者の存在を明確に意識する教育学であるということである。これまでの教育学は、人間形成の最終的な目的を、自己や自分、自我や主体を確立させることに置いてきたといえる。人間が成長する過程とは、親をはじめとする大人に依存する状態から抜け出し、自分のことはすべて自分でできるようになること、すなわち「個人として自立する過程」であるとしてきたといってよい。そして、教育とは、未熟な子どもたちを、そのような自立した大人に育てる営みであるとされ、教育学はそのような営みを合理的に行うために貢献する理論として構想され構築されてきたといえる。

では、従来の教育や教育学が好ましい人間像としてきた「自立した人間」とはどのような人間であったのか。具体的には次のような特性や資質を備えた人間であった。

自分の見方や意見をきちんと持っている。自分の意見をはっきり言葉にし表現できる。物事について合理的に判断できる。自分の行動は自分で判断し決める。何事も自主的に考えて行う。他人を頼りにせず、自分のことは自分です。誰か

に指図されずとも、自律的に行動できる。自分の行動には自分で責任を持つ。

このように書き連ねてくると、このような資質を身に付けた人間はいかにも尊敬に値する理想的な人間のように思えてくるし、だからこそ、教育の目標とされてきたのも当然であったと思えてくる。

しかし、今後も、無条件に、このような資質や特性を備えた人間を再生産することを教育の目的にしていいのだろうか。私の答えは否である。なぜそういうか。端的にいえば、自立した人間を絶対的によしとする人間観や教育観は、結局は、個人主義や利己的行動を是とし、能力主義や競争を奨励することになり、その結果、他者の存在をないがしろにし、他者との依存関係を軽視することにつながり、さらには、自立できない人間を軽んじ蔑視しさえし、他者への関心や愛着や信頼感をなくさせることになるからである。

詳しい論の展開は他日を期すが、共生社会の構築を目指すこれからの教育学は、このような人間像とは別の人間像を目指すべきである。別の人間像とは、自分の能力を高めることのみ重要視し、そのために他者と競い合い、他者に勝つことを目的にして能力をつけ、そうして得た能力を自分の利益のためだけに使い、何事も自分のことは自分でやり、他人には迷惑をかけない人間を望ましいとするのではなく、互いに他の人の存在を認め尊重し合い、互いに助け合いつつ学び、学ぶことで身に付けた知識や技能を他者の利益のために使うことを当たり前のこととするような人間をこそ望ましいとし、そのような人間を育てることを目的にした教育学であるべきだと考えている。

共生教育学の骨格をなすあと1つのことは、社会を構成する他の成員との関係を維持するための基本的な倫理を「ケア (care = 他者への配慮的な行為)」に求めるということである。他者の存在を認め、互いに尊重し合うことを最優先することで実現するのが共生社会であるとすれば、そのような他者との共存を維持する行動倫理は「ケア」とするしかないのではあるまいか。そのような考えは、すでに少なからざる研究者や教育学者たちによって提案されている。C. ギリガン、M. シモーヌ・ローチ、N. ノディング、今田高俊、広井良典、佐藤学、鷲田清一郎がそのような先学たちであるが、これら先学者たちの論説と考察を踏まえつつ、「ケア (care)」が共生社会の倫理になりうる根拠と普遍化しうる論理を、確かな証拠にもとづき説得的に展開していくことが共生教育学の重要な課題となるはずである。そうした論を一つだけ先取りして紹介しておこう。広井良典氏の論であ

る。(広井 2000)

「(人間のケアへの欲求の根拠は) 端的にいえば、それは人間という生き物が際立って『社会性』の強い生き物である、ということと表裏の関係にあるものである。…人間は、個体と個体間のコミュニケーションを中心とする強い社会性のなかではじめて『人間』となる生き物である。それはまさに『ケア』の関係ということであり、こうした意味で、人間はまさに『ケアする動物』である。人間が先に述べたような『ケアへの欲求』をもっているということは、こうした生物学的な事実由来のものということができる。」(pp. 17-20)

私は、ここでいう社会性を「社会力」として発展させ考察してきているが(門脇 1999, 門脇 2002)、詳しい論の展開は他日を期すことにする。

## 註

- (1) 日本語の共生社会に *decent society* なる英語を当てることが一般化しているわけではない。それを、敢えて、そうするのは寄稿者である門脇の考えによるものであるが、そうしようとする理由について詳述するのも別の機会に譲る。
- (2) 共生社会についてのこのような基本的なイメージは、*decent society* を市民社会(*civilized society*)と区別し、「その社会の制度の一切が構成員の誰の自尊心も傷つけない (*do not humiliate*) 社会である」としたマルガリットの提案に依拠している(Mar galit1996, p. 1)。
- (3) このような着想は、歴史の「進歩」について考察し、「(歴史の進歩とは) 科学的にホモ・サピエンスと認めうる各人が、責任を問われる必要のないことから受ける苦痛を、可能なかぎり減らすこと」と結論づけた市井三郎氏に負うものである(市井 1978, pp. 140-148)。

## 引用・参考文献

- ・池川清子 1991, 『看護』ゆみる出版。
- ・市井三郎 1971, 『歴史の進歩とはなにか』岩波書店。
- ・井上達夫 1999, 『他者への自由』創文社。
- ・今田高俊 2001, 『意味の文明学序説』東京大学出版会。
- ・内井惣七 1997, 「道徳起源論」『科学』1997年4月号。
- ・門脇厚司 1999, 『子どもの社会力』岩波書店。
- ・門脇厚司 2002, 『学校の社会力』朝日新聞社。
- ・川本隆史 1995, 『現代倫理学の冒険』創文社。
- ・川本隆史 1997, 『ロールズ』講談社。
- ・森 重雄 1999, 「近代・人間・教育」田中智志編『〈教育〉の解説』世織書房。

- ・佐藤 学 1999, 『学びの快樂』世織書房。
- ・澤田俊之 2002, 『頭を良くする脳科学』集英社。
- ・神野直彦 2001, 『〈希望の島〉への改革』日本放送出版協会。
- ・花崎皋平 1996, 『個人／個人を超えるもの』岩波書店。
- ・広井良典 2000, 『ケア学』医学書院。
- ・真木悠介 1993, 『自我の起源』, 岩波書店。
- ・鷲田清一 1999, 『〈聴く〉ことの力』TBSブリタニカ。
- ・鷲田清一 2001, 『〈弱さ〉のちから』講談社。
- ・鷲田清一 2002, 『死なないでいる理由』小学館。
- ・Covaleskie, John, 1996, *Preparing Citizens for a Decent Society*, Burstyn, J. N. ed., *Educating Tomorrow's Valuable Citizen*, State University of New York Press.
- ・Dawkins, Richard, 1976, *The Selfish Gene*. (1991, 日高敏隆他訳『利己的な遺伝子』紀伊国屋書店)。
- ・De Waal, Frans, 1996, *Good Natured; the origins of right and wrong in humans and other animals*, (1998, 西田利貞他訳『利己的なサル 他人を思いやるサル』草思社)。
- ・Dore, P. Ronald, 1976, *The Diploma Disease*. (1978, 松居弘道訳『学歴社会；新しい文明病』岩波書店)。
- ・Dore, P. Ronald, 1990, *Will the 21st Century Be the Age of Individualism?* (1990, 加藤幹雄訳『21世紀は個人主義の時代か』サイマル出版会)。
- ・Gilligan, C. 1982, *In a Difference Voice*. (1986, 岩男寿美子監訳『もうひとつの声』川島書店)。
- ・Margalit, Avishai, 1996, *The Decent Society*, Harvard University Press.
- ・Noddings, Nel, 1984, *Caring* (1997, 立山善康他訳『ケアリング』晃洋書房)。
- ・Noddings, Nel, 1992, *The Challenge to Care in School; an Alternative Approach to Education*, Teachers College Press.
- ・Roach, M. Simone, 1992, *The Human Act of Caring* (1996, 鈴木智之他訳『アクト・オブ・ケアリング』ゆみる出版)。
- ・Rawls, John, 1971, *A Theory of Justice*. (1979, 矢島鈞次監訳『正義論』紀伊国屋書店)。
- ・Sen, Amartya, 1992, *Inequality Reexamined*. (1999, 池本幸生他訳『不平等の再検討』岩波書店)。